



中国および東ティモールからの留学生。支援してくれたハワイの人々とともに(左から3番目が筆者)

え込ませた二年間だった。

人類学に付き物のフィールドワークでは、CAMの研究も兼ね、中華街、ホームレスら貧困層の生活に関する調査をするため、シエルターやショッピングモールの駐車場に向出した。貧困研究も行っていたのは、当時の日本におけるホームレスの増加があったからである。ハワイでは、中華街に集まるアジア系エスニシティの多様性、シエルター利用者の精神症状やドラッグ使用の管理の必要性など、現地で見聞きしたからこそ得られることがある。

った。

また、留学中人居していたEast-West Centerの寮の共同キッチンには、まさしく国際交流の場だった。当時の留学生は東アジア・東南アジア出身者が多く、中華文化圏内の幅広さ、食に見る南方文化との共通性など、教科書で習う難しい概念がフードとして表れていた。

▶人類学と看護

帰国後は研究・臨床と再び看護にどっぷりつかることになり、人類学やハワイ大学は遠い存在になりつつあった。そんな時、ハワイ大学留学の成果を思わぬかたちで発揮することになった。「看護も人類学も知っている人間がない」という理由で、分野横断的な私の経験を教員として活かすことになった。ちょうど、国際看護がキーワードとして取り上げられ始めた時期である。

▶そしていま

現在教鞭を執っている横浜の地は、ハワイと同じく多様なエスニシティを持つ人々が暮らす国際都市である。地域の小中学校では、さまざまな容姿や名前を持つ子どもたちが自然に交じり合っている。しかし、高等教育レベルでいうと、日本の留学生受け入れ人数は

約一三万八〇〇〇人であり、今後三〇万人に引き上げることが目標とされている。かくいう私もいずれは留学生を受け入れる立場に立てれば、という思いを温めている。そのために、ハワイ大学で出会った教授陣のように尊敬される存在になる、というのが目下の目標である。

神経疾患を持つことの意味を彼自身の姿で伝えていたRobillard教授のように、学生自身の思索を促す問いを発し続けたい。また、皇太子明仁親王奨学金奨学生で、日本の演歌研究で有名なYEO教授のように、複雑な理論を鮮やかに解きほぐす、切れ味抜群の講義を行えるようになりたいと願っている。

人類学はフィールドワークに基づき、他者の認識や他の文化を持つ特徴を明るみに出す看護学も看護実践というフィールドワークを通して、人々の健康への認識を明らかにし、健康の増進やQOLの向上につなげる。特に、現在教授している地域看護学は、地域で暮らす人々の健康にかかわる要因を探るときに、現地に赴き、現地の人々の生活をありのままに記述するという、人類学的方法を取り入れている。ともに他者とのかわりに根差した学問である、人類学と看護を武器にして、人がよく生きることの実践に取り組んでいきたいと考えている。

ハワイで学んだ人類学を 看護に活かす

横浜市立大学大学院医学研究科地域看護領域学准教授

大河内彩子

おおこうち

あやこ

皇太子奨学金奨学生(二〇〇一―二〇〇二年)。保健学修士(東京大学)。東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士(後期課程修了(博士(保健学))。愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻助教・講師を経て、現職。



留学とハワイ〜CAMへの興味

近年、海外に留学する日本人学生が減少する傾向にある。しかし、一二年前の私は、大学院生たるもの、とにかく留学しなければいけないと思い込んでいた。そんな時、京都大学のBecker教授の特別講義と看護学科の掲示板から、皇太子明仁親王奨学金の存在を知った。当時の私は、Complementary and Alternative Medicine(通称CAM、補完代替医療)がもたらす市民主体の医療の可能性を研究していた。ハワイといえばアジア系移民による独自の文化があり、生物学の最新の知

見に基づく医療と、鍼灸やハーブ療法などの伝統的な医療が自然に融合されている。しかもハワイ大学には、当時日本ではほとんど皆無であった医療人類学コースがあった。もはや私にとって、ハワイ大学留学は必然であり、運命であった。

ハワイでの生活

ハワイの青い海を眺めつつ降り立った Honolulu(在)空港で、皇太子明仁親王奨学金財団(在)ハワイ)のOkawa事務局長から、レイをかけていただいた。ハワイでは人々の他者に対する思いやりや愛情をアロハスピリットという

●皇太子明仁親王奨学金(二〇〇八年二月に名称変更)は、現在の天皇陛下のご成婚とハワイご訪問を記念して、ハワイの日系人、ホノルル日本商工会議所、経団連を含めたわが国経済界の協力により、一九六〇年に創設された。日米両国の相互理解と友好親善の推進を目的に、ハワイ大学と日本の大学との相互留学を行っている。

が、その意味を体感することが幾度もあった。日系の人々はもちろん、エスニシテイ(民族性)に関係なく、ハワイの人々は留学生に寛容であった。クリスマスシーズンのワイキキの華やきだけではなく、自宅での感謝祭、アメフト観戦での駐車場パーベキューなど、観光では味わえない米国文化をわれわれに紹介してくれた。

さて、肝心の学業について、私はAnthropology(人類学)学部の修士課程医療人類学コースに所属した。しかし、ここで壁にぶつかっていた。私はあえて、日本での専攻とは全く異なる分野をハワイ大学では志望した。「英語論文を読むことにはある程度慣れている」という慢心があったのかもしれない。しかし、簡潔明瞭で実践志向の医学系論文と、人類学のフィールドワークと西欧哲学の伝統に基づくそれとは質が違う。自分の無知を痛感しながら、それでも英語と人類学の世界観を体に覚